



TITLE:

木曾駒ヶ岳東面における,ニホンザル研究保護のための基礎調査を含めた地域ポピュレーションの把握に関する研究(Ⅲ 共同利用研究2 研究成果)

AUTHOR(S):

工藤, 樹一

CITATION:

工藤, 樹一. 木曾駒ヶ岳東面における,ニホンザル研究保護のための基礎調査を含めた地域ポピュレーションの把握に関する研究(Ⅲ 共同利用研究2 研究成果). 豊長類研究所年報 1971, 1: 68-69

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160440>

RIGHT:

側は第1頸椎の横突起に、3例は第1、第2両頸椎の横突起に筋小束をだしていた。特にその中の1側は筋腹が大きくわかれ、*M. splenius cervicis* と名づけてもよいと思われるほどだった。

頭最長筋 *M. longissimus capitis* : 起始では、caudal end は第5～第7胸椎、cranial end は第3～第4頸椎の横突起であった。8側のうち4側は乳様突起内側の近くにつく附着部近くで筋腹がうすい腱性の浅層と筋性の厚い深層に区別できた。また *M. longissimus thoracis* の着き近くの筋腹から巾約5mmのうすい筋束が、頭骨附着部近くの(本)筋腹に橋状に存在するのが1体の両側にみられた。

頭半棘筋 *M. semispinalis capitis* : Howell and Straus は、Rhesus monkey で本筋を *m. biventer cervicis* と *m. complexus* に区別しているが、ニホンザルの例では8側のうち2側のみ区別可能であった。(Nishi は Rhesus monkey 100側のうち29%可能とのべている。)また筋小束を乳様突起の内上方、*M. digastricus* のすぐ上に独立してだすのが1側にみられた。起りの caudal end は第5～第7胸椎で、cranial end は第2～第3頸椎の横突起であった。

下頭斜筋 *M. obliquus capitis inferior* : 第2頸椎の棘突起より起り、第1頸椎の横突起に着くが、上頭斜筋 *M. obliquus capitis superior* の後頭骨の着きの直下にまでその着きかのびているのが1例にみられた。

以上ニホンザル4体8側について頸部背筋群を観察した。例数がすくないのにもかかわらず数多い変異がみられた点は注目に値する。

以上45年度共同利用研究を行った研究結果であるが、46年度共同利用研究にも本研究はひきつづいて、データをそろえたのち詳細を発表する予定である。なお本研究は46年度解剖学会 関東支部会で発表の予定である。

文 献

1. Howell, A. B. and Wm. Straus, Jr. (1933) *The muscular system*. Chap. V: the anatomy of the rhesus monkey (*Macaca mulatta*) 89—195.
2. Nishi, S. (1939) Die Rückenmuskeln von *Macacus rhesus*. Ein Beitrag Zur Myologie der Primaten unter Berücksichtigung der menschlichen. *Jap. J. Med. Sci.*, 7, 153—171.

原猿類の発育段階的研究

茂原信生(東大・歯)

食虫目(主として日本産のヒミズモグラ *Urothrinchus*

talpoides)と、分類学的位置に疑問の残るツバイ(コモン・ツバイ *Tupaia glis*)のSoftex線による撮影によって、化骨年令を明らかにし、それと歯牙の萌出による年令区分とを比較する。

これによって、ツバイならびにヒミズモグラの年令推定を明確にし、両者の間における差異もしくは相似点を明らかにする。

霊長類の生活様式とロコモーション

——その形態学的観点からの解明——

田 隅 本 生(J・M・C*)

文献資料の収集に、かなりの時間を要したが、ほぼ本研究遂行上、必要かつ重要な50篇あまりの文献は整備された。

46年2月下旬および3月下旬の2回にわたり、上京して方法論の討議を重ね、解剖学的・力学的観点からアプローチすべく、資料の収集を開始した。

近い将来、この線に沿って研究成果を発表する予定である。

* 1971年4月より、京大、理、動物。

ニホンザル自然群でのロコモーションの研究

石田英実**・伊沢紘生***

渡辺 毅**

(**霊長研, ***J・M・C)

ニホンザルは半地上性のサルといわれ、自然群においては、樹上および地上を利用する生活形態をとっている。その中でいくつかのロコモーションパターンが見出されるが、それらが生活の中でいかなる<value>を有するかを分析することは、ニホンザルの運動器官の形態を機能的に考察するうえで、あるいはまた適応という観点からも重要である。このような目的から、積雪期における地上と樹上の利用状況、および雪上でのロコモーションの様態を中心として、白山自然群を対象に研究をおこなった。

木曽駒ヶ岳東面における、ニホンザル研究保護のための基礎調査を含めた地域ポピュレーションの把握に関する研究

工藤樹一(信大・農)

現在、極少になった自然林における、ニホンザルの研

究保護林のため、初期調査一歩ビュレーション把握の調査を、45年10月5日から、10月18日の14日間にわたり、木曽駒ヶ岳東面において行った。

ニホンザルとの接触は、10月6日に中央西線倉本駅東方2.5km地点において、初めて発見した。

同地点とは糸瀬山(1,867m)を中心にして、対向点である、須原水沢において、ニホンザルの声を確認しており、今その姿と声を確認した対象が同一のものとは、假かに断定し難いが、糸瀬山周囲においてはかなり、密度が高いものと思われる。また、10月18日に、池・尻斜面において、柿を食したものと思われる。以上の事をふまえ、倉本駅北東2kmの棧沢周囲においても、その痕跡濃厚であった。よって、この調査から最少限に報告できることは、糸瀬山と棧沢周囲に広がりをもつ2群が、少なくともいるのではないかと推察される。

湯河原T群を中心とした離脱個体の移動と繁殖について

村 松 正 敏

湯河原T群の個体数は'71・2月現在で104頭であった。社会性比率は年々低下し、'70・2月の35.7から'71・2月の15.2になった。この低下はリーダーの交替を含む雄(adult)の離脱に原因したものであった。一方、出産性比率は'67年から次第に低下したが、この傾向は隣接群のP群についても同様であった。しかしながら、P群は'67年以前に圧倒的に雄の多かったことからみて、ほぼニホンザルの一般的な数値になってきたといえる。4年間の出産性比率はT群の81.3、P群の100.0であった。しかしP群については過去8年間の推定が可能で、それによれば、133.3となっていた。ところで、雄の離脱に関して、従来までは6才~7才がピークであるとされているが(河合)、T群の場合には顔にイレズミのマーキングをした結果、4才未満で50%という結果を得た。この結果は過去3年においても同様に推定されていたものであり、6才未満になると、同年令の雄のうち90%~100%の離脱が観察された。マーキングされた4才未満の離脱個体のうち、100%が近接群(他3群に)に加入していた。しかし4才~10才未満の個体で離脱後他群へ加入した例は3例にすぎなかった。ところが、10才以上の雄が離脱した場合には、50%強が近接群に接近し(セミソリタリー的)、離脱後1年~3年で完全にメンバーとして加入していた。(群れから離脱して一定期間後に他群に接近するので、'70・6月から'71・10月の期間に離脱した、T群の成雄のその後の消息は判明していない。)

結局、各年次のT群の3才以上の雄の全個体数をそれぞれ100とした場合、過去5年間の年平均の離脱は17で、加入は8であった。

次に雄の群間交流が群内婚を結果として避け、血の交流がおこなわれるかという問題であるが、(ソリタリーのブリーディング・シーズンにおける一時的な接近による交尾例ではなく)他群から完全に加入した個体の配偶関係を観察した結果、T群加入の完成熟雄2頭については、若年発情雌との場合が最も多くみられ、ついで群れにおける中核的血縁系に属する雌との関係が共通してみられた。T群の血縁系は大別して4グループであったが、最も順位の高い血縁系出身の雄は最下位の血縁系雌と高い頻度において配偶関係がみられた。このことは群内の配偶関係が自己の血縁系を避け他の血縁系とにおいて高い頻度において成立することを示しており、群内配偶構造の大事な機構を示していると考えられる。さらに上位血縁系の成雄が最も個体数が多く長期群内に残っている点を考慮したとき、他群の加入雄が上位血縁系の成雄と配偶関係をもつことは、意味のあることであると考えられる。

湯河原における野生ニホンザルの社会生態学的研究

岡 野 恒 也(明星大・人文・心理)

神奈川県湯河町奥湯河原から箱根にかけて天照山群(T群)、パークウェイ群(P群)、広河原群(H群)、およびすくも群(S群)の4群の野生ニホンザルが棲息し、このうちT、P、Hの3群は奥湯河原側の斜面に、比較的接近して、行動域を重複させながら棲み分けている。1968年よりT群において顔に入れ墨のマークをつけて調べたところ、比較的若いオスが他の3群に入りこんでいることが分かった。このように接近した群れでは、テリトリーの境界は硬いものではなく、群れ落ちた若いオスはかなり容易に他の群れに受け入れられるようである。

1970年秋から1971年にかけて、T群について次の研究を行なった。

(1) adult maleの順位の確認: 例年群れは6月末より11月まで遊牧に出る。T群のトップリーダーは1965年以来Jir3であったが、1970年11月、餌場にもどった群れからJir5は離脱していた。1970年6月と12月のadult maleの順位を表1に示す。表中※印は、遊牧中に群れから離脱したものを示す。6月には4位までがリーダークラスと認められたが、12月には、3位のSatoruまでがリーダークラスと認められた。6月に10位であった